令和５年９月15日　第１１１号
都小行研会報

今こそ子供たちの笑顔につながる「これからの学校行事」を

東京都小学校学校行事研究会
会長　松田　隆
（調布市立飛田給小学校長）

令和五年度の会長を拝命した、松田　隆（まつだ　たかし）と申します。

五月八日に新型コロナウィルスが五類感染症に移行された当初は、感染症への不安も根強く、半信半疑の中での行動制限の緩和でしたが、ようやく街でも、公共交通機関の中でも、マスクを外す人の方が多くなってきたこの頃です。

コロナ禍の三年以上の長きにわたり、学校行事の実施に多くの制約があったことを思うと、大きな節目を迎えたことに感慨深いものがあります。今年度は各校様々な工夫と配慮のもと、学校行事が行われていることと思います。

その中では、「行動面での制約がなくなり、行事の運営がしやすくなった。」という声や、「参観者の制限をなくして、保護者や地域の方に子供たちの輝く姿をご覧いただくことができた。」という声が多く聞かれます。本当に喜ばしいことです。しかしその一方で、「ブランクが大きく、円滑に運営するためには大きな苦労があった。」「若手教員や、異動して着任したばかりの教員は、これまでの経験がなく、一つ一つ丁寧に確認する必要がある。」といった声も少なくありません。そのため、「やっとコロナ前に戻すことができる。」というだけでなく、「コロナ禍を経て、新たに得られた気付きを、よりよい学校行事の運営に反映させていく。」という視点をもち、職員皆で今後の在り方を考えていくことが必要です。

発行所・発行人
東京都小学校
学校行事研究会
会長　松田　隆
広報部
八王子市立
弐分方小学校
清水　隆司
TEL042-626-5811

本研究会においても、ここ数年は研究活動の中止や開催形式の変更などを余儀なくされましたが、今年度は六月六日（火）に、武蔵野市立第五小学校において定期総会、講演会を参集形式で実施することができました。八月三日（木）、四日（金）には小学校学校行事研究全国大会が初めて九州、熊本の地で開催され、本研究会も参加、協力、分科会提案などを行いました。全国各地の学校行事、特別活動を大切にする先生方と交流し、大きな刺激を受けました。また、例年同様、三学期には東、北、南、西の四地区で地区別研究発表会を行います。各地区とも、できるだけ多くの方に研究成果をお伝えすることができるよう、実施方法も検討しながら準備を進めています。なお、令和六年度の小学校学校行事研究全国大会は、八月六日（火）、七日（水）の二日間、東京大会として大田区羽田の会議場で実施します。こちらもぜひご予定おきください。

今こそ「本物体験、感動体験を通して、心を豊かにすること」「自分たちの力で成し遂げた、という達成感を味わい、仲間との絆をさらに深めること」など、学校行事が目指すものは何かを再確認した上で、子供たちの笑顔につながる、これからの学校行事の在り方を共に追究してまいりましょう。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

令和５年９月15日　第１１１号

都小行研会報

令和五年度 研究主題及び主題設定の理由

一　研究主題

「よりよい社会を自ら築く力を育てる学校行事の創造」

～「仲間」「本物」「感動」そして「共生」へ～

二　主題設定の理由

新型コロナウィルス感染症の流行により、ここ数年大変厳しい状況が続いていたが、令和五年度になってから、社会全体が少しずつかつての生活に戻り始めている。学校においても様々な制限が緩和される中、コロナ禍で培った知見をもとに各校の実態に応じて工夫をすることで、それぞれの学校行事のねらいに迫ろうと試行錯誤しながら実践を重ねている。学校現場では、以前にも増して、「何のための、誰のための学校行事なのか」という問いを持ちながら学校行事の意義を再確認しているところではないだろうか。これまで学校行事が果たしてきた「心が揺さぶられるような感動体験」を仲間とともに味わうべき時は、子供たちの学校生活が以前の状況に戻りつつある、まさに今であると考える。

本研究会では、現行学習指導要領が告示された平成二十九年度にこの研究主題を設定し、研究を重ねた上で、「よりよい社会を自ら築く力を育てる学校行事の創造」が必要であると考えた。学校行事を実践していく上で私たちが常に大切にしていきたい考え方として、今年度も本研究主題を継続して掲げ、研究を進めていくこととした。

学校行事は全校又は全学年の児童が行う活動であり、その時間や空間のダイナミックさから大きな感動につなげることができる。仲間と役割を分担し、自ら責任を果たしながら目標に向かって努力するからこそ、当日の特別な思いに至ることができる。そして、振り返りを通して自分のよさや友達のよさに気付き、互いを認め合い尊重する集団へと育っていく。また、事前・事後の活動も含めて、集団の中で互いに支え合い、役に立つ喜びや所属する安心感を味わうことを通して、自己有用感や自己効力感を高めていくことができ、それが自尊感情の向上にもつながる。

本会では、「よりよい社会を自ら築く力」を、「集団による体験活動を通して、周囲の人や社会に関心をもち、他者と関わり合ってよりよく生きようとする意識や態度」「未来に生きる社会を創り、その社会を運営しつつ、その社会を時代の変化とともに絶えず創り変えていくために必要な資質・能力」と捉えた。各学校で行われている学校行事が「主体的・対話的で深い学び」を実現しようとしているかどうかを押さえ、教師主導の形骸化しがちな内容や運営方法、指導方法を見直し、特別活動全体のつながりの中で創り上げられる学校行事本来の役割と有効性を提唱し、子供たちに、平和で民主的な社会を築き、そこに生きるための汎用的な能力を育みたいと考え、本研究主題を設定する。

東京都小学校学校行事研究会

一九六三年（昭和三十八年）に正式発足した歴史のある研究会です。子供たちと一緒に作り上げる学校行事について、考えていきましょう。

ホームページは
こちらから→

【令和五年度　定期総会報告】

令和五年六月六日（火）、武蔵野市立第五小学校にて定期総会が開催されました。当日は、参集のみの開催で決議が行われ、令和四年度の事業報告・決算報告・令和五年度の役員案・事業計画案・予算案は承認され、会長には、調布市立飛田給小学校長　松田　隆が選出されました。本会報にてご報告させていただきます。

また、総会後は前全国小学校学校行事研究会会長であり、現在は八王子学園なかよし幼稚園園長　清水弘美先生の講演会が行われました。

「学校行事パラダイムシフト」と題した講演会では、自校の学校行事の進め方について問題はないか、振り返る機会となりました。

・見える学力「認知能力ＩＱ」に対して、見えない学力「非認知能力ＥＱ」は学校行事で育むことのできる力である。
・人とのつながり、他者との協働、感情の調整、目的の達成が相互に影響し合うことで共に伸びていく。

【本年度の役員・顧問・参与】

○会　長　松田　隆（調布・飛田給小）
副会長　鈴木　恒雄（武蔵野・第五小）
細井　鏡子（大田・北糀谷小）
菅谷　万里子（世田谷・京西小）
○研究部部長　清原　周栄（国立・第四小）
○事務局長　山久保　正治（八王子・上壱分方小）
○事務局次長　越前　信（武蔵野・本宿小）
○広報部長　清水　隆司（八王子・弐分方小）
○広報部次長　星野　哲朗（小金井・南中）
○会計部長　田村　亜紀子（練馬・大泉南小）
会計監査　川島　一樹（国分寺・第二小）
○地区発表担当者
東地区担当　神谷　なおみ（江東・第一大島小）
北地区担当　田村　亜紀子（練馬・大泉南小）
南地区担当　細井　鏡子（大田・北糀谷小）
西地区担当　星野　哲朗（小金井・南中）
○顧問
亀井　亮　染谷　忠臣　小林　裕子
松本　忠史　宮城島　勝史　野田　照彦
藤本　三征男　永森　修吾　山森　健吉
池田　政次　入江　章　荒木　俊夫
佐々木康次郎　加藤　純　坂本　正
清水　弘美　小川　賀世子
○参与
田中　正輝　古谷　玲二　栢木　昭典
鈴木　治子　廣澤　義夫　安部　正
篠原　壯夫　西村　陽子　鈴木　左千子
原田　昌明　齋藤　節子　阪田　多門
渡辺　昭　橋本　治典　畠山　正樹
濵　勝　南部　和彦　松井　眞澄
渡邉　浩一　実川　栄一　鈴木　唯史
伊藤　弘志　瀬戸　敬

【令和五年度　事業計画】

○総会・講演会　六月六日（火）
○役員会　四月十五日（土）　九月四日（月）
十二月七日（木）　三月十四日（木）
○第五七回小学校学校行事研究全国大会
九州・熊本大会への参加
八月三日（木）・四日（金）
会場　一日目　くまもと森都心プラザ
二日目　熊本市国際交流会館
市民会館シアーズホーム
夢ホール
○地区別研究発表会
西地区　令和六年二月二一日（水）
場所　府中教育センター
南地区　令和六年一月二二日（月）
場所　大田区立北糀谷小学校
※東・北地区は紙面発表となります。詳細は別途ご案内します。

【小学校学校行事研究全国大会　九州・熊本大会報告】

令和五年八月三日（木）四日（金）、熊本市、くまもと森都心プラザや熊本市国際交流会館にて、九州地方開催初となる第五七回小学校学校行事研究全国大会　九州・熊本大会が開催されました。東京都小学校学校行事研究会からは、ＯＢ・ＯＧ含め、二十名ほどが参加しました。

《大会主題》

『多様な他者と協働して、よりよい生活をつくろうとする学校行事の創造』

～つけたい資質・能力の焦点化と取組の工夫～

《主題設定の理由》

（１）社会の情勢から

社会の変化に受け身で対応するのではなく、一人一人が主体的に関わり合い、その過程を通して自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら作り出していくことが重要である。

（２）教育の動向から

学校は多様な人々とのつながりから構成される一つの社会である。特に学校行事は多様な他者との関わりを深めることができ、達成感や自己の成長を感じることのできる教育活動である。その積み重ねによってよりよい生活をつくろうとする意欲、持続可能な社会づくりを担っていこうとする態度を育てることにつながっていく。

（３）特別活動の実践上の課題から

新型コロナウィルスの感染拡大は、学校教育にも多大な影響を与えた。しかし、学校行事の教育的意義が再確認され、制限される中でも創意工夫しながら「どうやったらできるか」を模索しながら、やるべきことが焦点化された。今後は、その経験を踏まえた新しい形の学校行事の実現も期待できる。

《研究の仮設》

学校行事において、「つけたい資質・能力」を焦点化した取組を工夫することで、子供たちは多様な他者と協働し、学校行事を通して達成感や自己の成長を感じることができ、よりよい生活を築こうとする子供が育つだろう。

《研究の視点》

【視点１】学校行事における「つけたい資質・能力」の焦点化

【視点２】達成感や自己の成長を感じることのできる取組の工夫（評価の工夫）

以上の研究構想のもと、五つの分科会に分かれ、教育実践の発表が行われました。

《記念講演》

「多様な他者と協働して、楽しく豊かな生活をつくる学校行事～日本社会に根ざしたウェルビーイングを目指して～」と題して、國學院大學人間開発学部教授　杉田洋先生による記念講演がありました。

一、日本発のウェルビーイングの実現

二、多様な他者と協働できるようにし、だれ一人取り残さない集団の教育力

三、日本社会に根ざしたウェルビーイングを目指すための指導と評価

四、各種の教育課題を意識した学校行事

五、明日への希望を育てる教師力